

文教大学大学院言語文化研究科 博士学位論文審査結果

申請者氏名	カ アイカ	報告番号	甲第 2 号
学位の種類	博士（文学）	学位授与年月日	2019 年 3 月 16 日
学位論文題目	日本語：『唐話纂要』の音注に関する研究		
	英語：A study of the Chinese pronunciation transcribed into Japanese in “ <i>Tou Wa San You</i> ”		
審査委員	蔣 垂東（主査：本研究科教授）、白井 啓介（副査：本研究科研究科長）、長谷川 清（副査：本研究科教授）、加納 陸人（副査：本研究科教授）、石崎 博志（副査：佛教大学准教授）		

1. 論文内容の要旨

本論文の研究対象である『唐話纂要』は 18 世紀初めに成立した日本で初めての本格的な中国語学習書である。日本における中国語の学習史や教育史を知る直接的な資料であることはもとより、中国語の歴史的資料としても高い価値を有し、多くの先行研究がある。中国語の歴史的資料としては、語彙面と文法面ですでに重要な研究成果が挙げられているのに対し、仮名音注に反映された中国語音の特徴の分析と考察、即ち音韻史料としての面においては未解決の課題が少なくない。その原因の一つとして、中国語の音注法が十分に解明されていないことが挙げられる。本研究は、同書の中国語の音注に用いられる補助記号——当時日本語の表記に使用されなかったものもあれば、日本語の表記と異なる意図で使用されたものもある——の使用実態の解明を主要な目的としている。また、仮名音注に対する分析を通して同書音注に基づく基礎方言の特定およびその特徴についても考察している。

本論文は、下記の通り、「はじめに」（第 1-10 頁）、第一～七章（第 11-568 頁）、資料・参考文献（第 569-582 頁）、添付資料 1、2（第 582-598 頁）より構成されている。

はじめに

第一章 中国語音韻史料としての唐話資料——『唐話纂要』

第一節 『唐話纂要』の背景概述

第二節 主な唐話資料とその価値

第三節 『唐話纂要』の基礎研究

第四節 清代初期の中国語音

第二章 『唐話纂要』に関する先行研究と問題の所在

第一節 『唐話纂要』基礎音系に関する先行研究と問題の所在

第二節 『唐話纂要』の表記形式に関する先行研究と問題の所在

第三節 音注の音韻面の特徴に関する先行研究と問題の所在

第四節 南京官話と呉方言について

第三章 『唐話纂要』の音注の表記形式

第一節 右肩点「°」について

第二節 中間点「○」について

第三節 『唐話纂要』における延音点「ゝ」について

第四節 声調の表記について

第四章 仮名音注に反映された中国語の声類

第一節 声母ごとの対応関係の分析

第二節 本章のまとめ

第五章 仮名音注に反映された中国語の韻類

第一節 韻摂ごとの対応関係の分析

第二節 本章のまとめ

第六章 「小曲」音注の音韻的特徴

第一節 「小曲」について

第二節 「小曲」の仮名音注の実態と音韻的特徴

第三節 本研究と先行研究との違い

第七章 総まとめ

第一節 表記面の特徴

第二節 音韻面の特徴

資料

参考文献

添付資料1 『唐話纂要』「常言」「長短話」「小曲」項目数の集計表

添付資料2 『唐話纂要』の字体整理

「はじめに」は、本研究の動機・目的・意義について述べた上、『唐話纂要』の研究史の概略を辿りつつ、音韻面の課題を明らかにし、課題解決のための研究手法および見込まれる成果などについて述べた。また、本論文の構成、既発表の雑誌論文および口頭発表と本論文との関係を明示した。

第一章「中国語音韻史料としての唐話資料——『唐話纂要』」では、『唐話纂要』の時代背景と密接な関係をもつ唐船貿易、唐通事制度、主な唐話資料とその価値について概述した上、研究対象である『唐話纂要』に焦点を当て、著者である岡島冠山の人物像、特にその中国語の学習背景、中国語の能力、関連著作、それに『唐話纂要』の版本・構成・中国語の注音方法などに対する確認と検討を踏まえて、『唐話纂要』が基づく基礎方言の可能性を南京音と呉方言杭州音の二つに絞り込んだ。さらに、同書成立当時の中国語音を知る上で必要となる明末清初の中国語の音韻状況について主要な韻書資料に沿って概覧し、長崎唐通事が学習、使用していた中国語の種類、特に杭州音は実際に学習されていたにもかかわらず、役職として杭州通事が置かれなかった問題を取り上げて論じた。

第二章「『唐話纂要』に関する先行研究と問題の所在」では、『唐話纂要』音注が基づく中国語の基礎方言について単一音系説、混合音系説、その他の説の三つ、中国語音の表記方式について右肩点、中間点、踊り点、声調表記の四つ、音注の音韻面に見られる中国語音の特徴について声母面と韻母面の二つに分けて、それぞれ先行研究に対する整理を通して、問題点を明らかにした。

第三章「『唐話纂要』の音注の表記方式」では、中国語の表記に用いられた補助記号の右肩点「°」（延べ1,256例）、中間点「○」（延べ1,437例）、踊り点「ゝ」（延べ1,287例）、声調点（延べ98例）に対し綿密な用例調査を踏まえて使用実態と使用意図の両面から考察した。右肩点「°」については、先行研究で説が分かれているサに対する「°」は中国語の無気音[t̚]と有気音[t̚ʰ]のどちらか一方ではなく、両方に対応していることを明らかにした。中間点「○」については、先行研究によって存在が指摘されている「イ段＋○＋ウ」の使用例が誤記で、同書には「イ段＋○＋ウ」の使用例が実質存在しないことを明らかにした。先行研究で言及のない踊り点「ゝ」の用法については、直前の母音を延ばす「延音点」として解釈し得ると指摘している。「無表記」とされる声調については、複数の読みをもつ「多音字」を中心に声調記号が用いられていることを明らかにした。また、『唐話辞書類集』所収再版本の一部に四声点も存在することを指摘した。

第四章「仮名音注に反映された中国語の声類」では、中国語音の音注に用いられる全ての音訳漢字(2,538字、延べ15,289例)について、中国語中古音における声母(子音面)での帰属を、「五音」と呼ばれる調音点に

よる分類法に従って、整理した上、南京音、吳方言の蘇州音・杭州音と対照して、対応関係を整理しつつ、声母面に見られる音韻的特徴を分析している。音注から見られた特徴は先行研究のいう杭州音に符合するが、全濁声母の無声化を反映するものなど一部に南京音の混入が認められると指摘した。

第五章「仮名音注に反映された中国語の韻類」では、中国語音の音注に用いられる全ての音訳漢字(2,538字、延べ15,289例)について、中国語中古音における韻母(母音・声母)面での帰属を、「16韻摂」と呼ばれる主母音と韻尾の違いによる分類法に従って、整理した上、南京音、吳方言の蘇州音・杭州音と対照して、対応関係を整理しつつ、韻母面に見られる音韻的な特徴を分析し、音注から見られた韻母面の特徴も先行研究のいう杭州音に符合すると指摘した。なお、第四章と第五章では、各方言音について現代音の他に、それぞれの歴史的資料として、南京音は『西儒耳目資』(1626)、蘇州音は『同文備考』(1540)、杭州音は『三音正譌』(1752)と『磨光韻鏡』(1744)を参照した。

第六章「『小曲』音注の音韻的特徴」では、文体の異なる巻五の「小曲」(歌謡)の音注について考察した。「小曲」の音注が他の部分と違って、文雄(1752)のいう二種類の官話の内の入声を保存しない「中州音」に基づくものとされているが、再検討の結果、吳方言のみならず北方官話も一部混入していることを明らかにし、全体として官話音であることを確認しつつ、入声の音注が存在していることを踏まえ、「小曲」の部分の基礎方言が「中州音」ではなく、入声を有するもう一種類の官話音であると指摘した。

第七章「総まとめ」では、第三～六各章での分析、考察から得られた結果をまとめつつ確認した。最後に、本研究の残された課題などについて述べた。

末尾に本研究において引用、参照した文献を資料と参考文献に分けて掲載し、『唐話纂要』の項目集計表と一部の異体字・俗字の字体対照表を参考資料として添付した。

本論文の中核となる部分は第三章と第六章であり、第三章の第一、二節は、『唐話纂要』における圈点の使用実態についてとして『言語文化研究科紀要』第2号(2016.03)に掲載された論文、第三節は『唐話纂要』における「ㄣ」についてとして日本中国語学会第66回全国大会(2016.11、於立命館アジア太平洋大学)での発表を経て『中国語研究』第59号(2017.10)に掲載された論文に基づいている。第六章は、第5回日中韓三国日本言語文化に関する国際学術シンポジウム(2017.11、於文教大学)で口頭発表した『唐話纂要』における巻五の小曲の音注の音韻特徴を増補したものである。

2. 審査結果の要旨

『唐話纂要』を中国語の音韻史料として用いる研究には、中国語音がどのように表記されているかと仮名表記された中国語音にはどのような特徴が見られるかという二つの側面があり、両者は密接に関連し合うが、前者は後者にとっての前提である。本研究は前者に重きを置いている。中日両言語の音韻組織は著しく異なるため、『唐話纂要』における中国語音の表記には、仮名を複雑に組み合わせて使用する他、日本語の表記体系になかった記号を補助的に使用したり、あるいは日本語にあった補助記号を別の意図で用いたりするなどの工夫が少なからず見受けられる。右肩点、中間点、延音点、声調点などがその典型的なものである。これらの補助記号は著者岡島冠山独自の試みではなく、同時代の他の文献にも見られるものだが、正書法のようなものが存在しなかったが故著者或いは文献によって使用意図や使用実態に様々な違いが見られるため、『唐話纂要』の音注に反映された中国語音を正確に知るには同書におけるこれらの補助記号の使用実態の解明は基礎的研究として必要不可欠なものである。この分野の研究の現状では、右肩点については十分に明らかにされたとは言えず、声調点にいたっては全く触れられていない。『唐話纂要』における右肩点、中間点、延音点の使用実態について確認するだけでなく、先行研究を補足し、修正している点および声調点の存在を初めて明らかにした点が本論文で高く評価されるべきポイントである。また、音注が他の部分と明らかに異なる巻五の「小曲」について、再検討の結果、先行研究の説を修正した点も本論文の成果の一つと言える。同書が収録する2,538字、延べ15,289例の音注例を全てデータ化し、中古音の分類に従って声母別と韻母別の表

で示し、検証可能にした点も本論文の大きな特徴の一つであり、不備な点があるものの、根気の要る作業でその意欲と努力は評価されるべきであるものと判断する。

各章で評価された点は次の通りである。

第一章は、『唐話纂要』の時代背景、中でも著者岡島冠山の中国語学習歴と能力水準などを史実に基づいて念入りに調査し、要領よくまとめている。『唐話纂要』の成立時期が唐船の主要出港地が福建から杭州音の呉方言区に移った時期と重なるとの指摘は、『唐話纂要』のベースが杭州音であることを考える上で示唆となるものである。第二章は、先行研究を念入りに調査しているだけでなく、必要な整理を行い、問題点を浮き彫りにさせている。第三章は、右肩点「[◌]」については、先行研究で見方が分かれているサに対する右肩点の用法(延べ 217 例)について、中国語の無気音[ʔ]と有気音[hʔ]のどちらかではなく、両方に対応していることを明らかにしている。ハ行に対する右肩点(延べ 937 例)も無気音と有気音の双方に対応していること、中国語の[a]に対応する右肩点についても「稀」ではなく、延べ 393 例に上っていることを確認している。中間点「○」については、先行研究が指摘した「イ段+○+ウ」の例は誤記であることを明らかにし、同書における中間点の使用は「ア段+○+ウ」(延べ 301 例)と「エ段+○+ウ」(延べ 277 例)の二種類であることを確認した。踊り点「ヽ」(延べ 1, 287 例)については、主として母音仮名の後に用いられていることに着目して直前の母音を延ばす「延音点」として解釈し得るとの見方を示している。声調表記については、本研究によって複数の読みをもつ「多音字」を中心に一部声調記号(延べ 98 例)が用いられ、読み間違いを防ぐのがその目的であることを明らかにし、「声調が無表記」との通説を覆している。

第六章は、音注が本体の部分の異なる第五巻に収録されている 10 首の「小曲」の音注について先行研究に依拠しつつも丹念な用例分析を経て呉方言のみならず、北方官話の要素も混入していることを明らかにし、全体として官話音に基づくものであると確認した上、その官話音は入声が存在しない「中州音」ではなく、入声のある別の官話音であることをつきとめ、先行研究の説を修正している。第三章と第六章の主要な結論は綿密な用例調査という実証的な手法に基づくもので、説得力があるものである。

ただし、次のような不足な点も存在している。

第四章と第五章の音注の仮名表記に対する分析では、当時の日本語における仮名の表記慣習なども念頭に置く必要があるが、仮名の用法に対する理解と分析に不十分な点が見受けられ、例えば、「テイ」については [ti] とする箇所もあれば、[tei] とする箇所もあるなど、見方が一定しない。方言音との対照においては現代音をそのまま使用するケースが見られる他、参照にした各方言音の歴史的資料と現代音との関係を十分に整理しておらず、資料の性格に対する理解も十分とはいえないところがある。分析のプロセスにおいて表に対する説明が不足し、論述方法も全体から部分へという手順を踏んでいない部分があり、「結果ありき」という印象が拭えず、結論の信憑性を損ねてしまう結果を招いている。一部南京音が混入していると指摘するが、混入原因の分析に踏み込んでいないことが惜しまれる点の一つである。第六章の「小曲」の音注については、「小曲」の伝来経緯が明らかにされていないことは、呉方言と北方官話の混入の原因解明を難しくしている。第三章で指摘した再版本に見られる四声点の実態解明や「ルヽ」のような非母音仮名に付く踊り点の解釈などが課題であると言わざるを得ない。上記の他、誤植など表現上の不備が目立ち、冒頭の部分は「序論」としての内容を有しているにもかかわらず、「はじめに」という見出しに拘っていること、「資料」には「参考文献」に入れるべきものが多数含まれていることなど形式面で本論文の評価を下げる点もある。

以上のような不足点や課題があるが、本審査委員会としては全員一致で、本研究が『唐話纂要』の音注における補助記号の使用実態をほぼ解明したこと、収録されている全ての字と用例をデータ化し、中古音の分類に従って声母別と韻母別の表で示し、検証可能にしたことは、音韻史料としての『唐話纂要』の基礎的研究を前進させたものと認め、その研究意義を評価し、博士学位を授与するに値する論文であると判定した。なお、口述試験と論文本体を通じて外国語の能力は十分保有すると判定した。